SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

「エンドレスエイト」と「終わりなき日常」(誌上シンポジウム『涼宮ハルヒの憂鬱』)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中尾, 健二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009221

誌上シンポジウム

「エンドレスエイト」と「終わりなき日常」

“Endless Eight” and “Endless Ordinariness”

中尾健二
Kenji NAKAO
静岡大学情報学部・教授
nakao@inf.shizuoka.ac.jp

2009年にテレビ放映され、同年にDVDも発売されたアニメ版『涼宮ハルヒの憂鬱』第2期には「エンドレスエイト」と名づけられた8話が含まれている。対応する谷川流の原作ノベルは『涼宮ハルヒの暴走』[1]に収められた同名の短編である。アニメ版8話はその名が示すようにほぼ同じストーリーが8回繰り返される。ある特定の期間が無限に繰り返される、いわゆるループものである。具体的にいえば、ハルヒの提案で夏休み後半を遊び倒そうと、プール遊び、花火見物、金魚すくい、昆虫採集などをリストアップし、SOS団の仲間たちが8月17日から30日までにそれをこなしていく2週間を描いている。しかし、次の回がまた8月17日から、その次の回もまた8月17日から始まるというぐあいに、レコード針がレコードの同じ溝を再生しつづけるかのごとくストーリーが反復される。9月1日は永遠に来ないのだ。キョンと古泉一樹はこの繰り返しのなかでかすかな既視感をおぼえるのだが、未来人である朝比奈みくるの「未来に帰れなくなりましたあ！」という悲鳴とともに事態がはっきりしてくる。ただひとり事態を認識している長門有希に確かめてみると、この時間のループはじつに1万5千回以上繰り返されているというのだ。ループを引き起こしたのは、ハルヒの「まだ何かやり残している」という本人もほとんど自覚していない気分のせいのようだ。というわけで、このループから抜け出すことが8話を通じてのキョンの課題になるのである。

この「エンドレスエイト」に対しておおくのファンから怒りの声があがった。それは大きく二つに分けられる。内容的にほとんど同じストーリーを8回も見せられるのはたまらないというものとDVDの売り方に対するものである。2話が一枚に収められたDVDをまともに買うとなると、定価が6930円であるから「エンドレスエイト」だけで3万円近くの出費を強いられる。せめて4話を一枚にというわけだ。いずれも無理はないが、後者については現在新品でも値がかなり下がり、市場原理が健全に働いた結果、ファンの怒りもある程度収まっていよう。前者については、お気に入りの作品ならば好きなだけ何度鑑賞しても楽しいものであるが、強制的に同じような話を8回見せられることが、いかに人間心理にとって一般に耐え難いかの例証なのかもしれない。『ハルヒ』第一期の高い人気をこの表現上の実験の資源としているのであれば、ファンの死屍累々の上に「エンドレスエイト」が築かれているわけで、それを覚悟でつくってしまった制作者側の内情は知るよしもないが、『新世紀エヴァンゲリオン』テレビ放映版最終回（1996年3月放映）とならぶ果敢な「暴挙」として長く記憶されてよいだろう。

ループものといえば、だれしも押井守監督の傑作アニメ『うる星やつら2　ビューティフル・ドリーマー』（1984）を思い浮かべることだろう。高橋留美子の学園SFドタバタコメディ・マンガをベースに押井が独自の世界を造形しえた、日本アニメ史に残る作品である。友引高校を中心とした友引町一帯がいわば「閉鎖空間」と化し、永遠に文化祭前夜を繰り返す。教師のひとり温泉マークはカビのはえた自室で執拗に問う、「今日はいったい何月何日なんでしょうね」と。主人公あたるの学友である面堂所有のハリアー戦闘機にのって皆が空中高くから俯瞰してみれば、なんと友引町は巨大な亀に背負われて漆黒の宇宙を飛んでいるではないか。これを引き起こしたのもまた、虎皮模様のビキニをまとった、おしかけ女房型異星人ラムの「ずーっとこのままでいたい」というかわいい夢なのであった。もちろん、この夢が現実化されるには請負人である夢邪鬼の存在があってのこと。あたるを中心とした、それぞれキャラがたった登場人物たち独自の夢邪鬼との闘いが、「連帯を求めて孤立を恐れず」といった感じで繰り広げられる。最後は「いざ現実へと帰還せん！」とあたるの吹くラッパの音とともに著作権マーク©をつけた子ブタが巨大化し（貘？）、このループする夢の世界を食い尽くす。

もはや「エンドレスエイト」との構造的類似性は明らかだろう。かたや文化祭前夜かたや夏休みと高校生にとっての祝祭的な時間が無限にループする。しかし、これははたして理想郷といえるのだろうか。『うる星2』にあっては朽ち果てた友引高校が象徴しているようにこの安逸な理想郷には頽廃の影がさしているし、「エンドレスエイト」にあっては1万5千回以上の反復に耐え、それを認識し記憶している長門に対するキョンの畏怖と同情という形でその外部が指し示されている。キョンは長門に「最近どうだ？元気でやっているか？」とおもわず声をかけてしまうのだ。第8話目、1万5千498回目に「これで終了。・・・また明後日、部室で会いましょう」といって喫茶店を出ていくハルヒの後ろ姿に、今までにない強い既視感にとらわれたキョンがはじめて「俺の課題はまだ終わってねえ！・・・そうだ、宿題だ！」と叫ぶ。ハルヒは「勝手に決めるんじゃないわよ」ととりあえず激怒するものの最後は「あたしも行くからねっ！」。ハルヒの言いなりにつきあっていたキョンがはじめてイニシャティブを握った瞬間にループは解かれるのである。

ハルヒはどこか憎めないもののとんでもない自己中少女である。さらにこのシリーズの根本設定としてハルヒの気分次第ではこの世界がメチャクチャになってしまうのであるから、ハルヒの自己＝世界である。[2] だから「何かやり残している」という漠然としたハルヒの気分のせいで世界全体がリセットされ、同じ期間を繰り返しつづけたわけである。しかし、逆にいえば自己＝世界であれば、そこに他者は存在せず、これほど孤独なこともまたあるまい。だから、ハルヒの世界に他者として介入する役回りを、このシリーズ全体をとおして少なくとも潜在的に担っているのがキョンなのである。

わたしはこの「エンドレスエイト」という作品があることを聞き知ったとき、すぐさま宮台真司がそのオウム真理教についての著作で提起したテーゼ「終わりなき日常を生きろ」を連想した[3]。たぶん「エンドレス」と「終わりなき」が結びついてしまったのだろう。むろん宮台の「終わりなき」という形容句が、世界最終戦争というオウム真理教における終末論的な観念に対抗して持ち出されていることは承知している。ここでは「終わり」がいわば夢想で「終わりなき」が現実の日常なのだから、「エンドレスエイト」とは逆転している。地下鉄サリン事件が起こった90年代半ばにカルト教団であれサブカルチャーであれ、宮台の概念を借りれば「核戦争後の共同性」という終末論的観念がひろまったことは考えてみるべき問題だろう。いうまでもなく、この観念は観念にとどまらず、オウム真理教が引き起こした一連の事件と震災

ボランティアという形で現実化もされたのであった。一方は人殺し、一方は人助けと正反対の方向へ分岐しているにしても、そこには共通の根があるのではないか。この「終わりなき日常」の連続を切断して、その外部へ出ようとする欲望はいったい何であったのか。すくなくとも現実の日常には何かが決定的に欠けている、という意識であるとまではいえるだろう。

涼宮ハルヒ・シリーズには、強いていえば語り手としてのキョンが外部（大人の世界）ではあるものの、ドラマとしてそのような外部はまったく存在しない。超常現象もまたハルヒの内部に帰属させることができるからである。世界はハルヒの気分次第という設定は、セカイ系とよばれる作品群[4]の枠組を踏襲している。しかし、セカイ系にあった戦争という背景がここではまったく消去されている。セカイ系にあって戦争が恋愛を急進化させるために、たんなる恣意的な手段として持ちこまれているにすぎないとすれば、ハルヒ・シリーズはセカイ系の問題点を克服しているといえるだろう。戦争なしにセカイ系のストーリーを成立させたことは、作家の創意と力量であると評価もできるが、ここからは片仮名のセカイすら消えてしまっているのではないかという危惧も同時に生じる。古泉一樹も長門有希も朝比奈みくるも異能の、この世ならぬ人びとであるが、なんとかれらは「この」日常を保持するために参集してきたのである。そういう意味では、ハルヒ・シリーズは「終わりなき日常を生きろ」という要請に忠実に応えている。そして普通の人間キョンはこの「日常」学級の優等生である。しかし、この優等生に対しては共感とともに「そこで完結してよいのか」という気がどうしてもしてくるのである。

それは、この「日常」が学園という領域に閉ざされているように思われるからである。いずれのストーリーも学友たちだけで完結しており、それ以外の人びとは、家族であれ教師であれ街の人々であれ点景にすぎない。セカイ系であれば、とにかくそこに戦争があるのだから、学園は限りなく相対化されている。『ほしのこえ』であれば、「きみ」は何光年もはなれた宇宙空間へ異星人との戦いのために旅立っていく。『イリヤの空』であれば、特殊機関で育てられた「きみ」は学園のプールにおそらく生まれてはじめてやってくる。そして『最終兵器彼女』であれば、兵器にされてしまった「きみ」は戦闘のたびに学園から有無をいわさず召喚されるのである。大人の世界が、いいかえれば社会が暴力的に、あるいは宿命的に学園に介入してくる。この事情はおおかれすくなかれ陰惨さに彩られているが、この陰惨さは『宇宙戦艦ヤマト』[5]的な空虚な崇高さへの批判として意味があると同時に、ぎりぎりのところで倫理的なものへの関与を失ってはいない。ところが、ハルヒ・シリーズでは「崇高さ」が気高く描かれることがないのは当然としても、暴力的あるいは宿命的なものとして外部が描かれることもない。そもそもそのような形をとって描かれる社会がそこには存在しないからである。

キョンの奮闘にはおおいに声援をおくりたいが、そこから社会へ出ていく通路は見えにくい。ハルヒ・シリーズは学園という閉域で——いや、ある特定の期間に止まり続けながら、というべきか——さまざまなエピソードが展開される。そういう意味で「ループ」であり「エンドレス」である。したがって、「エンドレスエイト」8話という表現上突出した作品群は、この『涼宮ハルヒの憂鬱』という作品全体への注釈的要約であり、またその自己批評となっているのではないだろうか。こうして「エンドレスエイト」は、押井が『うる星2』で行ったアニメ生産の自己批評と呼応することになる。制作者たちがこのような「暴挙」をあえて行ったことの理由は、それ以外に考えることができないのである。

だから、キョンはハルヒ・シリーズ全体にむかってこういうべきだろう、「俺の課題はまだ終わってねえ！」と。

注

1. 谷川流『涼宮ハルヒの暴走』（2004 年、角川書店）pp7-85.
2. これは極端なまでに誇張された心理学化であり、その戯画ととらえることもできる。
3. 宮台真司『終わりなき日常を生きろ』（1995 年、筑摩書房）。
4. 一般に新海誠『ほしのこえ』、秋山瑞人『イリヤの空、UFO の夏』、高橋しん『最終兵器彼女』が代表作として挙げられる。危機に瀕した世界のために戦う戦闘美少女としての「きみ」と普通の「ぼく」との恋愛が戦争を背景に描かれる。世界の存亡の鍵をにぎっているのは、この「きみ」なのである。
5. 1974 年にテレビ・アニメが放映され、1977 年に劇場アニメが公開された。現在にいたるまでその続編がつくられつづけている。放射能汚染された地球を救うため、はるか宇宙の彼方までその除去装置をとりにいく話である。

（受付日：2012 年 9 月 23 日）